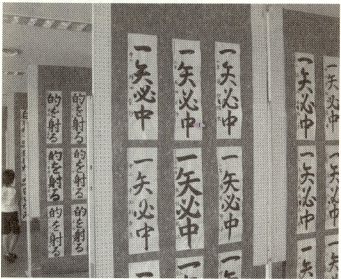




井原駅のモニュメント



与一まつり 書道展



与一を偲ぶ古典芸能祭 実行委員長 木山さん

運営には商業的なスマートさは無いかも知れない。でも、皆、活き活きと動いている。本来の意味での「郷土芸能」はこのように産まれ、こつこつと育つていくのだらう。

井原市 **弓と古典芸能**
 福山駅を出た列車は沿線の中心地、井原駅に向かう。建設年代が新しいため路線は殆ど高架だ。30分ほどで井原駅に着く。白銀の駅舎の屋根はゆるやかなカーブで弓を、駅前の円錐形のシンボルタワーは鏑矢(かぶらや)を表現している。井原市は「弓の町」といふ。

話は八百余年前に遡る。平安末期の元暦2年(1185)旧暦2月、屋島合戦で平氏の女官の乗った小舟の扇の的を見事射抜いた那須与一。与一は平氏滅亡後、恩賞として丹後国五賀荘・若狭国東宮荘・武藏国太田荘・信濃国角豆荘・備中国

後月郡荏原荘を賜る。この荏原荘が現在の井原市で市内には那須氏の菩提寺・永祥寺、与一公墳、小菅城跡などゆかりの史跡がある。

井原市では毎年8月第3日曜日「与一を偲ぶ古典芸能祭」が開催される。私が井原市を訪れたのは28回目の祭の前日。メイン会場のアクティブライフ井原で、実行委員長の木山資郎さんにお話をうかがった。

「井原市は那須与一公ゆかりの地で、市のスポーツとして弓道が盛んでした。私も昔から弓道をしており、古典芸能祭に先立って西日本最大の弓道大会の井原開催に携わってきました。私はまた尺八をたしなんでもお

アートフル・レイルロード 井原鉄道

柳沢道生



井原鉄道 特別企画車両 夢やすらぎ号 福山駅にて

井原鉄道 『夢やすらぎ号』井原鉄道は岡山県総社市と広島県神辺町間のローカル私鉄、旧山陽道に沿った町を結んでいる。

神戸を起点に西へ路線を延ばしていった山陽鉄道が明治24年(1891)、岡山と福山間を建設したとき、路線は海沿いの比較的平坦な土地に敷設された。山陽鉄道は、急行、食堂車、寝台車など日本の鉄道サービスの最先端を担ってきた。瀬戸内航路の汽船との激しい競争をかかえていたからだ。もちろん、スピードの確保は最大の使命であった。

岡山県西部の旧山陽道は、小田川沿いの内陸部を通っていた。鉄道の恩恵に与れなかったこの地域には、井原鉄道が設立され、大正2年・井原

笠岡間に軽便鉄道(軌間762mm)が開通した。その後、路線は矢掛、神辺へと延伸された。現在の井原鉄道の西半分にあたる。戦後のモータリゼーション普及に伴い、昭和46年(1971)、鉄道事業から撤退し、社名は井原鉄道のままで路線、バス、貸切バス事業などを行っている。

昭和41年(1966)旧国鉄により吉備線の延伸と山陽本線のバイパスを目的として井原線、総社と井原、神辺間の建設に着工、井原鉄道の線路跡の一部は新線に利用された。だが、昭和55年(1980)、採算が困難とされ一部の線路や高架が完成していたが、工事は中止される。

昭和61年(1986)、岡山県、広島県、周辺自治体の出資により第三

セクターの井原鉄道が設立される。工事は再開され、平成11年(1999)11月11日に開業を迎える。

路線は総社と神辺間41.7km、うち清音と総社間3.4kmはJR伯備線の路線を使用する。また、神辺からJR福塩線に乗り入れ、福山駅発着となる列車もある。福山と総社間の直通列車は両端がJR路線を走る珍しい運用形態である。

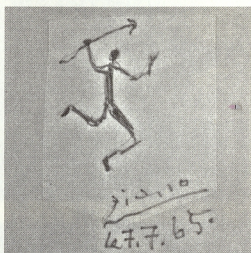
今回、乗車した列車も福山発総社行き。井原鉄道の誇る特別企画車両『夢やすらぎ号』1両のみだ。この車両は岡山市古備津出身のインダストリアルデザイナー、水戸岡鋭治氏の作品である。

水戸岡氏はJR九州の特急787系「つばめ」、九州新幹線800系などを設計、JR九州のスローガン「鉄道ネットワーク」をデザインで表現した。岡山電鉄の超低床車「MOMO」も彼のデザインである。

『夢やすらぎ』は黄色の塗装、木調の室内というシックな雰囲気。土日曜日に定期運行されている。アートっぽいレイルロードへ誘ってくれる車両として申し分ない。



やかげ郷土美術館 水見やぐら



やかげ郷土美術館所蔵の
ピカソのスケッチ
65年7月7日のサインがある
が正しくは5日とのこと

この美術館は、個人
の偶然の機会を歴
史的な出来事にする
翼をも担っていた。

「開館当初から、展示だけでなく、
地域の人々が活用する美術館を目
指してきました。絵画、俳句、書道な
ど幅広い講座があり
ます。現在200名
に1〜2回の講座に
参加しています」

に矢掛町出身の芸術家の作品が常設
展示されている。
館内に入り、目についたのはロビー
に並ぶ、ペイントされた傘の作品。
「小学生のワークショップの作品です。
なかなか人気があるんです」と学芸
員の坂口優子さん。館内を歩くと、
常設展示室と並び小中学生の絵画作
品が展示されていた。技巧においては
論ずるまでもないが、のびのびと描
かれた絵画が並んでいた。
本口東館長にお話を伺うと
「開館当初から、展示だけでなく、
地域の人々が活用する美術館を目
指してきました。絵画、俳句、書道な
ど幅広い講座があり
ます。現在200名
に1〜2回の講座に
参加しています」

力を持っていた。
坂口さんが、ふと口にした一言
「ピカソのことは、ご存知ですか」
聞けば「こんなピノードだった。
矢掛町出身で、当時三菱地所の社
長職にあった渡邊武次郎氏が昭和
40年1965渡欧した時、南仏のピ
カソの工房を訪問、ピカソの作品を買
い求めて、写真を撮っているところ
にピカソ本人が現れた。
たまたま、渡邊氏の背広の上着に
あったタバコの焼け焦げの穴を見つ
けた。ピカソは、笑いながら
「絵を描いて穴を隠してやろう」と
言い出した。渡邊氏はワイシャツの
ポケットに描いてとリクエスト。ピカソ
も快諾、そこに描いてくれた。
渡邊氏は平成9年(1997)103
歳で逝去された。生前、美術館には
様々な提言や寄付をされてきた。逝
去後、ご遺族から件のワイシャツと
その時工房で求めたピカソの絵皿3
点が美術館に寄贈された。ピカソの
工房訪問時、穴のあいた背広を着て
いたのは全くの偶然だ。しかし、人々
の思いが集い、美術館の歴史に新たな
1ページが刻まれたのである。

やかげ郷土美術館

本陣から北に徒歩1〜2分、木造
の塔と建物が見える。やかげ郷土美
術館。高さ16メートルの塔は水見や
ぐら。小田川の水運は自然の脅威と
の緊張関係の対価でもあったことが
わかる。平成2年(1990)の設立に
際して矢掛町の町木・赤松を使用し
伝統工法で建てられた本館。旧山陽
道の町並みや本陣・脇本陣を見慣れ
た目にも何の違和感もない。
書家田中塊堂かいどう(明治30
年(1897)〜昭和51年(1976))、
洋画家佐藤一章いっしょう(明治38
年(1905)〜昭和35年(1960))、共

やかげ 矢掛町 宿場町の美

井原駅から東に3駅、10数分で矢
掛駅に着く。駅前には木造の塔が立
っている。

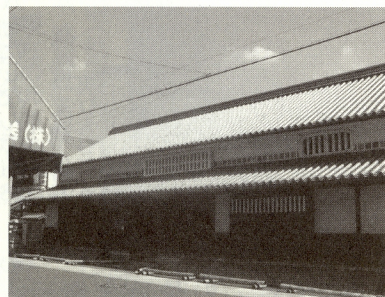
駅から南に5分も歩けば、旧山陽
道第18番目の宿場、矢掛宿の町並み
に至る。日本のあちこちに江戸期の
宿場町は残っているが、ここは間違い
なくトップレベルだと言えてよい。

本陣石井家、脇本陣高草家がかつ
ての姿のままで残されている。ともに
国の重要文化財に指定されているの
はここだけ。しかも、本陣、脇本陣を
含む街道沿いの家並みが、旧山陽道
を挟んでかつてのままで残されている
いや、正確に言えば残そうという不
断の努力が注がれているのである。何
しろ人が生活し、商売しているのだ。

石井家の先祖は毛利家家臣であつ
たが、矢掛の町で「佐渡屋」の屋号で
代々酒造業を営み、矢掛宿本陣と町
年寄を務めた家柄である。

石井家屋敷は大きく分けて、公家や
参勤交代の大名、幕府の役人などが宿
泊した本陣部分と、家業の酒造関係の
蔵、長屋、室などで構成される。
本陣部分には大名からのお礼、茶碗

など美術工芸
品、本陣に宿泊
した公家、大名
を示した木の
表札、宿割り
や宿泊者の献
立など貴重な
資料が展示さ
れている。
総勢五〜六
百人に及ぶ参
勤交代の宿割
の大変さ、宿



旧山陽道に面した 本陣・石井家

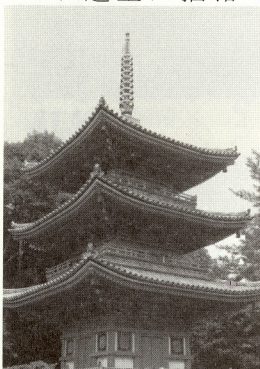


本陣を利用した大名から贈られた茶器

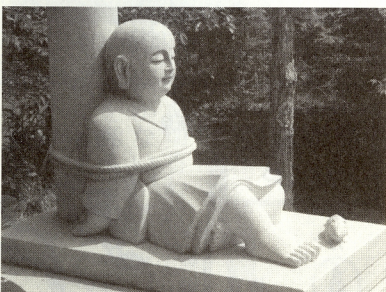
泊した大名の献立が一汁三菜だった
のに対し、幕府役人は一汁四菜、に
もかわらず幕府の役人は歴史支払
が滞ったことなど、一般の歴史書か
ら窺えない現場の苦労がわかる。
酒造部分は店土間から土公神が
祀られた中土間、米蔵、釜場、酒蔵、
中門、絞り場、そして長屋門と街道
から南に長く伸びている。今、屋敷の
南側は国道486号線に面している。
その先は小田川だ。かつては屋敷の南
側が川に面していた。小田川は高瀬
舟水運の盛んであった高梁川の支流。
矢掛宿や酒造業「佐渡屋」の繁栄は、

この地が陸路・山陽道と小田川水運
の接点であったことも一因だろう。
本陣、酒造業部分とも質実な雰囲気
のなかに機能美を持った建物である。
本陣部分の技巧を凝らした欄間
や丹精された庭などは、贅を凝らし
ているが華美ではない。しかし、例え
ば壁面にどんな絵画や書か掛けら
れても、西洋の巨匠の絵画でも、ひけ
を取ることもない空間を供している。
そんな美だ。改修に際して、本瓦を
奈良の業者に制作させた。その厳格
さ、美に対する鋭い目はこうして培
われていったのだろう。

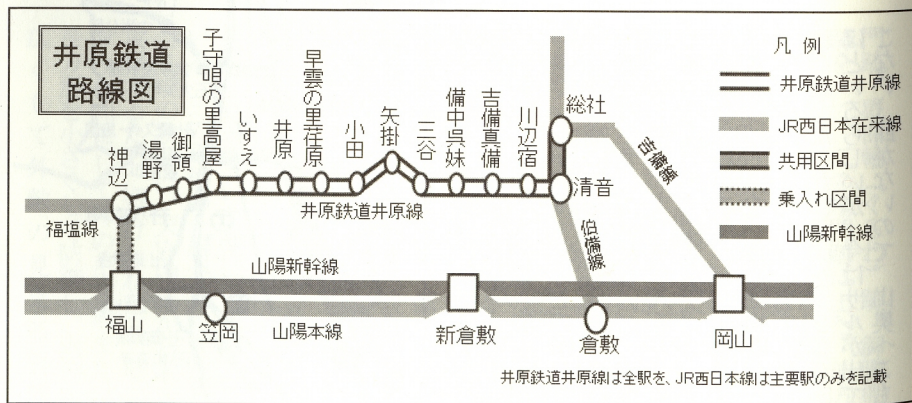
雪舟の没年は永正3年(1506)と伝えられ、平成18年(2006)は没後五百年に当たる。総社市文化振興財団では平成13年(2001)から雪舟の里総社 墨彩画公募展を実施。第6回は没後五百年記念として入選作品展は総社市、倉敷市、岡山市の3会場で開催された。



国の重文 宝福寺・三重の塔



雪舟 涙で風を描く石像



吉備真備と困碁の話
 きびのまきび
 話は飛鳥時代末期、奈良時代に飛ぶ。あちこち飛んで申し訳ないが、それだけこの一帯に様々な年代の史跡・逸話が残されていると、理解いただきたい。また、ここではアートを広義に「技芸」と解釈願いたい。困碁の話である。

この時代、備中国下道(しもつみち)郡、小田川流域、現在の矢掛町から倉敷市真備(まび)町を統治していたのは下道氏であった。吉備国の造山古墳、作山古墳の建造者にも比定される下道臣の流れをくむ名家である。下道真備、後の吉備臣真備公は持統9年(795)、下道氏の当主(因勝)くにかつの子として生まれた。

真備公は養老三元年(717)23歳で留学生として入唐。天平7年(735)多くの典籍とともに帰国。その後聖武天皇、光明皇后の寵愛を得て吉備朝臣(あそん)の姓を賜る。天平勝宝3年(752)遣唐副使として再度入唐。翌年、僧鑑真を伴って一旦は種子島に漂着するも帰国する。帰国後右大臣に昇進、学者から大臣まで出世したのは公と菅原道真のみだという。

没年は宝龜6年(775)である。

真備公の遺徳を偲び、矢掛町に吉備真備公園、倉敷市真備町にまきび公園がある。

吉備真備公園には巨大な真備公の銅像が建っている。さらに日本最大と見られる石造の碁盤がある。案内板の説明を要約すれば、真備公入唐時、唐人たちが公の智力を試そうと、当時日本には無いとされていた、困碁の勝負をその道の名人に挑ませた。勝負は接戦だったが最後は公がその知略で勝った。これが公を我が国の困碁の開祖とするという逸話である。

平成16年(2004)5月に矢掛町合併50周年を記念し、吉備真備公園で困碁フェスティバルが開催された。テント張りとはいえ、野外での対局というユニークな大会だったとのこと。銅像の真備公も千数百年ぶりに打つてみたくなつたのではなからうか。



吉備真備公の銅像



石の碁盤モニュメント

アートへのスタンス
 ここまで紹介した様々なアート、いずれも単に眺めたり観賞したりという類のものはない。様々なレベルの人々が、それぞれ自主的に参加できる仕組みがある。地元の人にとつてこれらのイベントへの参加は、ごく日常的なことなのだろう。

推測だが、渡邊氏がピカソに接した態度も、そんな肩肘の張らないスタンスだったので。だから気難しいと言われたピカソも、ごく陽気にペンを走らせてくれたのだろう。